

早稲田社会学会ニュース 第50号

2017年10月27日発行

早稲田社会学会事務局

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学部 社会学研究室内

Tel: 03-5286-3742

E-mail: socio-office@list.waseda.jp

URL : <http://www.waseda.jp/assoc-wss/>

今回のニュースの内容

1. 第69回早稲田社会学会大会の報告
2. 2017年度早稲田社会学会総会の報告
3. 2017年度研究例会の報告
4. 2016年度研究助成の報告
5. 2017年度研究助成について
6. 入退会者のお知らせ
7. 学会費納入のお願い

1. 第 69 回早稲田社会学会大会の報告

第 69 回早稲田社会学会大会は、2017 年 7 月 8 日（土）に早稲田大学戸山キャンパス 33 号館第 1 会議室において開催されました。報告者および報告題目、司会者、討論者は次のとおりです。

一般報告

- 司会者： 田辺 俊介（早稲田大学）・麦倉 泰子（関東学院大学）
報告者： 清水 克郎（岩波書店）
 ボブ・ディランの社会学
 酒井 宏明（早稲田大学大学院文学研究科）
 「社会の心理学化」論の再検討
 大坪 真利子（早稲田大学文学学術院）
 「常人の視角」における同性愛者の不可視性の問題について
 大窪 彬夫（早稲田大学大学院社会科学部研究科）
 『社会分化論』の再解釈の試み

シンポジウム 「人文・社会科学の危機」を考える

- 報告者： 田中 千津子（学文社）
 苦境に立つ学術専門書の飛躍を思う——編集者の現場からの視点
 太郎丸 博（京都大学）
 科学の政治化と社会学の「危機」
 松本 三和夫（東京大学）
 学術と社会の境界面で想起すべきこと——科学社会学者の視点
- 討論者： 那須 壽（早稲田大学）・山田 真茂留（早稲田大学）
司会者： 大黒屋 貴稔（聖カタリナ大学）・関水 徹平（立正大学）

シンポジウム報告

2015 年度より 3 年間にわたって「社会学的知の可能性」を共通テーマに行われてきた連続シンポジウムの最終年度にあたる今回は、「人文・社会科学の危機」を考える」とのタイトルのもと、田中千津子氏、太郎丸博氏、松本三和夫氏の三氏を報告者にお招きし、シンポジウムを開催した。そのような「危機」として語られる人文・社会科学内外の変容に関し、その実態とそれを産み出す社会的な背景・文脈とを、社会学的な視点から明確に把握することがねらいである。

第 1 登壇者の田中千津子氏の報告「苦境に立つ学術専門書の飛躍を思う——編集者の現場からの視点」では、人文・社会科学に関する専門書の出版界の現状が確認されたのち、それが直面する「危機」の内外の要因が分析された。内的な要因としては、アマゾンに代表されるインターネット書店の普及による書籍流通構造の変化等の事態が、外的な要因としては、大学をとりまく制度的・経済的情勢の悪化や研究者の研究意欲・倫理の劣化といった事態が指摘され、検討された。

第 2 登壇者の太郎丸博氏の報告「科学の政治化と社会学の危機？」では、学問分野別の科研費の推移、同分野別の大学院進学者数の推移、科学に対する信頼と保守主義との関係の 3 つの論点が検討された。第 1 の論点に関しては、文系（人文・社会科学）よりも理系（自然科学）の方が厚遇されているというより、文理融合型領域への助成額の増大が目立つこと、第 2 の論点に関しては、文系で増加率が低く理系で高いという傾向はみられるものの、前者でも健闘している専攻や後者でも顕著に縮小している専攻が少なからずあり、専攻間のバラツキの大きさの方が目立つこと、第 3 の論点に関しては、保守主義者は文理を問わず学問全般への信頼度が低いことが指摘された。最後にまとめとして、文理の対立という軸よりも「学問（reflexive な知）とテクノロ

ジー（instrumental な知）の対立」といった軸で考える方が事態をより正確に把握できるのではとの問題提起がなされた。

第3登壇者の松本三和夫氏の報告「学術と社会の境界面で想起すべきこと——科学社会学者の視点」では、まず、目標志向研究（実学）の「短期的な成果主義」という評価基準があやまって基礎研究（基礎学）に適用されたところから、「人文・社会科学の危機」は生じてきたことが指摘された。そのうえで、そうした制度上の失敗の責任を問う仕組みをつくることや、運営交付金の増大・競争的資金の傾斜配分によって、基礎研究の一層の拡充を図ること、プロジェクト付きの事業担当費としてではなく、研究のための人件費として資金を配分すること等が提言された。

講演ごとに設けられた質疑応答ならびに最後の総括討論の時間には、討論者の那須壽氏・山田真茂留氏のお二人をはじめ、フロアからも質問・意見が多数寄せられ、提題をめぐり活発な議論がなされる中、シンポジウムは熱気の内にも幕を閉じた。

（聖カタリナ大学 大黒屋 貴稔／立正大学 関水徹平）

2. 2017年度早稲田社会学会総会の報告

2017年7月8日（土）17:15～18:00まで早稲田大学戸山キャンパス33号館第1会議室において、2017年度早稲田社会学会総会が開催されました。

1. 議長選出

桜井 洋 氏が選出されました。

2. 議事

2-1 報告事項

- 1) 理事会活動報告（竹中庶務担当理事）
- 2) 研究活動委員会活動報告（田辺研究活動担当理事）
- 3) 編集委員会活動報告（草柳編集担当理事）
- 4) 2017年度研究助成の申請と採択について（竹中庶務担当理事）

2-2 審議事項

- 1) 2016年度決算案の件（嶋崎会計担当理事）
※同封の決算報告をご参照ください。
- 2) 会計監査報告（大久保監事）
- 3) 2017年度予算の件（嶋崎会計担当理事）
※同封の決算報告をご参照ください。
- 4) 次期役員選出の件
- 5) 次期会長承認の件

総会において、以下のように次期役員が推薦され、承認されました。

会長 那須 壽（早稲田大学文学学術院）

編集担当理事 田辺 俊介（早稲田大学文学学術院）

研究活動担当理事 石倉 義博（早稲田大学理工学術院）

会計担当理事 土屋 淳二（早稲田大学文学学術院）

渉外担当理事 大久保 孝治（早稲田大学文学学術院）

庶務担当理事 竹中 均（早稲田大学文学学術院）

関水 徹平（立正大学）

熊本 博之（明星大学）

菅原 謙（宮城大学）

麦倉 泰子（関東学院大学）

津田 好美（早稲田大学文学学術院）

監事 山田 真茂留（早稲田大学文学学術院）

柄本 三代子（東京国際大学）

3. 2017年度研究例会の報告

第39回研究例会が、以下のとおり開催されました。

テーマ：戦後日本社会学知の変容を考える

日時：2017年5月20日（土）14:00～17:30

会場：早稲田大学文学部（戸山キャンパス）39号館5階第5会議室

司会者：大黒屋貴稔（聖カタリナ大学）・関水徹平（立正大学）

報告者および題目：

齋藤圭介（岡山大学）

「戦後日本の社会学者の専攻分野の重複と差異——多次元尺度構成法を用いた時系列変化に着目をして」

関水徹平（立正大学）

「社会学知における当事者経験の位置」

片上平二郎（立教大学）

『『実証的なもの』と『教養的なもの』との間で——批評的な社会理論のゆくえ』

研究例会報告

本年度の研究例会では、片上平二郎氏、齋藤圭介氏のお二方をお招きするとともに、研究活動委員の関水が加わり、計3名が報告をおこなった。共通の主題である「戦後日本の社会学のあり方（の変化）」をめぐる、実証的・理論的な研究報告がなされた。

第一報告の齋藤氏は、日本社会学会の学会名簿（1991年、2002年、2010年）における「専攻分野」情報を、多次元尺度構成法（MDS）を用いて分析し、社会学者の問題関心の重なり具合の変化を明らかにした。分析結果からは、根強い人気分野（社会思想、家族、地域等）の存在、現在の社会学者の主要分野として「文化・宗教・道徳」「コミュニケーション・情報・シンボル」「社会福祉・社会保障・医療」があること、戦後日本社会学の中心は農村研究、都市研究、家族研究などであったと論じられてきたが、そうした中心があるとはいえない可能性があることなどが指摘された。

第二報告者の関水は、社会学知と日常知の関係を主題とする報告であった。社会学と社会の関係がますます問われるようになった現状を確認したうえで、2009年の日本社会学会会員調査から回答者の約9割が積極的に社会貢献すべきと考えていることを紹介した。さらに、ライフヒストリー（中野卓）からライフストーリー（桜井厚）への方法論的变化と当事者経験への注目という研究動向が、社会学知の日常知への還元という要請と連動している可能性が示唆された。

第三報告の片上氏は、アドルノの学的態度を主題として、社会学のあり方や可能性についての考察を展開した。批判的（批評的）社会理論が、「文化」や「芸術」を社会空間における相対的に自律的な空間とみなして、それにコミットすることで「有用性」に対する応答をあえて保留し「ここにはない現実」を描こうとしたこと、「実証主義」が社会を構成する矛盾を統計的平均として調和させることに対して、矛盾を矛盾のまま描こうとしたこと、これらの点でアドルノにとっての社会学は芸術的実践と共通点をもつことが指摘された。そのうえで、戦後日本の社会学の中にアドルノ的な社会学の実践の流れ（作田・見田ら）があったのではないかと報告を結んだ。

三つの報告はいずれも現在の社会学のあり方を反省的にとらえようとする試みであり、社会学という学問の行方に対する不透明感や危機感を共有するものであった。フロアからも今後深めていくべき論点が示され、有意義な研究例会になった。

（立正大学 関水徹平／聖カタリナ大学 大黒屋貴稔）

4. 2016 年度研究助成の報告

昨年度の研究助成の対象は、次の 1 件の研究でした。

- 1) 研究題目： 時間のファンクショナリズム——見かけの現在から機能的現在へ
研究代表者： 飯田卓 氏（早稲田大学・非常勤：申請時）
助成額： 15 万円

研究成果の概要について以下の報告書が提出されました。

- 1) 「時間のファンクショナリズム——見かけの現在から機能的現在へ」
飯田卓（東京情報大学）

本研究では、「現在」という時間様相の三つの水準を区別し、「現在」を行為の関数として捉える時間論を展開した。時間という概念には人間の行為が含まれていること、そうした人間の行為はつねに歴史的・文化的・社会的状況とともにあること、けれども同時にそのような状況は当の行為によって支えられ、あるいは変容されること、このような行為と状況との相互規定的な循環関係のなかで複数の時間が交錯し、多様な意味内容を帯びた時間がそのつど構成されること、以上の論点が解明される。

さらに、「同時性」という概念を批判的に検討したうえで、単独の行為内在的な観点から時間を論じる限界を画定し、「社会的時間」はいかにして可能かという問題を考察した。とくに A. シュッツの動機連関（レリヴァンス連関）の議論を時間論として読み解くことによって、相互行為論の観点から「社会的現在」を中心とする「社会的時間」の構成が考察される。そこでは、自我と他我の「時間意識」を区別したうえで統合しようと試みるのではなく、はじめから両者が協働してひとつの「社会的現在」を構成する機制が主題化される。

5. 2017 年度研究助成について

2017 年度の研究助成の募集に対して 1 件の申請があり、2017 年 7 月 8 日の理事会で審査した結果、以下のとおり助成が決定されました。

- 研究題目：「中国残留孤児二世のエスニック・アイデンティティに関する研究——生活史にみる世代間継承と変容」
研究代表者：張 龍龍 氏
助成額： 15 万円

6. 入退会者のお知らせ

理事会において以下 2 名の入会が承認されました。（以下、敬称略）

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 2017 年 5 月 20 日理事会 | 酒井 宏明（早稲田大学大学院文学研究科） |
| 2017 年 5 月 20 日理事会 | 田口 祐介（無所属） |

理事会において以下の3名の退会が承認されました。(以下、敬称略)

2017年5月20日理事会	今井 千恵
2017年5月20日理事会	野畑 眞理子
2017年5月20日理事会	平川 徹

7. 学会費納入のお願い

本年度の学会費が未納の方、および過年度分の未納がある方宛てに、振り込み用紙(お名前と該当の未納年度を印字しております)を同封いたします。早急にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。なお、本状と入れ違いになりました節はご容赦ください。

口座番号：00100-3-38020 (郵便振替)
加入者名：早稲田社会学会
(年会費：一般会員 5,000円 学生会員 3,000円)

複数年度分の会費を納入される場合、および転居・異動などがあった場合には、通信欄にその旨を明記ください。なお、年会費の納入記録についてのお問い合わせなどがありましたら、事務局(socio-office@list.waseda.jp)までご連絡ください。

■学会費の納入にご理解とご協力をお願いいたします！

近年、学会費納入率が低下しており、学会運営に支障をきたしております。会員の皆様には、引き続き、早稲田社会学会活動にご理解いただき、会費を納入いただけますようお願いいたします。

以上